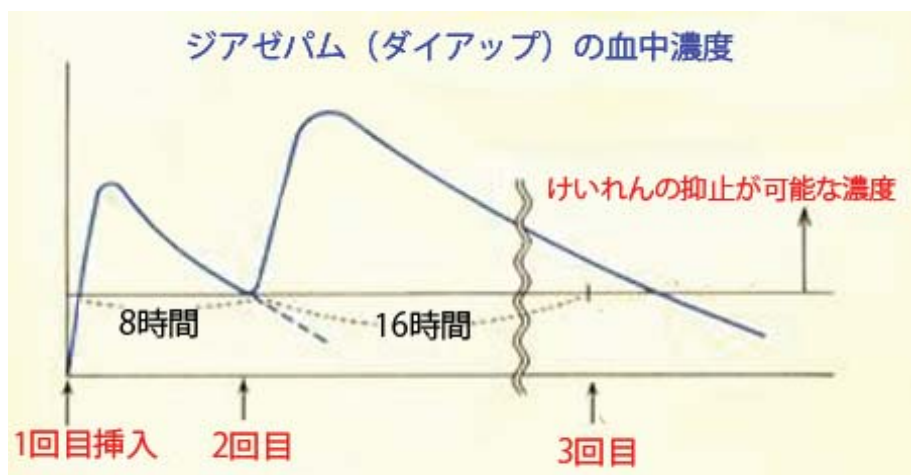




## 熱性けいれんとは

38度以上の急な発熱に伴い、強直性(手足が硬くなる)・間代性(手足がガクガクする)などのけいれんや意識障害を起こす病態を示します。けいれんは急に熱が上がる時に起こすことが多く、数分以内におさまります。未成熟な脳が発熱により刺激されるため起こるものと考えられています。

小児の約10人に1人に起こるとされ、1歳から3歳までが好発年齢です。けいれんを繰り返すのは、更に3人に1人程度で、ほとんどの症例が就学期までにはけいれんをおこさなくなります。

発作時間が長かったり(15分以上)、頻繁にけいれんを起こす場合、てんかん要注意因子のある場合は脳波等の検査を行うことがあります。

**熱**性けいれんを一度だけ起こしたお子さんにどう対応すべきかは意見の分かれるところですが、当診療所では、一応全例にダイアップ座薬の予防投与を勧めています。実際の対応を以下に記します。

1) 概ね37.5度を越す発熱に気づいたら、まずお渡ししてあるダイアップ座薬(4,6,8 mg)をお尻に挿入する。

2) 座薬を入れた後、8時間後に再度熱を計り、37.5度以上だった場合には、再び同量のダイアップ座薬を挿入する。眠気がでて、ウツラウツラとするかもしれませんが、呼びかけて目をさます程度ならば全く心配はありません。

3) その16時間後に再度熱を計り、発熱が持続しているようなら、更に1個座薬を追加投与する(解熱している場合は追加投与の必要はない)。ダイアップ座薬の使用は通常はこの3回目で終わり。

4) その後も高熱が続く場合には、必ず当診療所もしくは近医を受診し、その後のダイアップ使用法について指示を受ける。

5) 熱性けいれんの既往があるお子さんには、解熱剤は極力使用しないようにしましょう。解熱剤が切れて再び熱の上がる時に発作を誘発する可能性があるからです。医師との相談の結果、十分な管理の下に解熱剤を使用できる場合はこの限りではありません。



### けいれんが起こった場合の対処

- まずは慌てずに、横向きに寝かせ、頭をやや背中側へそらせてください。これは唾液や嘔吐の際の吐物で窒息するのを防ぐためです。
- 時計を見てけいれんの始まった時間を確認します。ダイアップ座薬があれば挿入し、体温を測定します。
- けいれんがおさまるまで、必ずそばにいてください。口から水分や薬を与えないでください。おおむね10分以内にけいれんはおさまるでしょう。
- 唇や顔色まで紫色になるような呼吸困難を認める際は直ちに救急車を呼んでください。
- けいれんが10分を越えるような場合、短い間隔で何度も発作を繰り返す場合、けいれん後に意識障害や手足の麻痺がある場合も、救急車を呼んでください。
- 保育所等にもダイアップ座薬をひとつ預かっていただき、「37.5度の発熱があったら入れて、連絡をください」とお願いしておくとういでしょう。
- 医師との十分な相談の上、解熱剤座薬(アンヒバ)をダイアップ座薬を併用する場合は、先にダイアップを挿入し、30分以上待ってからアンヒバを挿入するようにします。飲み薬の解熱剤(カロナール)の場合には、時間をずらす必要はありません。